

## 『モンスター化』への危機感

はるき ゆきひろ  
春木 幸裕

NTT労働組合・企画組織部長

昨今テレビドラマにまでなった『モンスターペアレント』。急速に増殖し、その理不尽さは笑いを乗り越し、恐怖心さえ抱かせる。

最初に聞いた話は笑えるものだった。とある幼稚園のお遊戯発表会「桃太郎」で、主役の桃太郎が続々と桃から登場。理由は、桃太郎役に選ばれなかった園児が保護者に泣いて訴えたところ、その保護者が幼稚園に怒鳴り込んできた。他の保護者への連鎖を恐れた幼稚園側は、希望した園児全員を桃太郎に抜擢。結果、桃から生まれた桃太郎が10数人。

その笑いを乗り越した実態が「給食費を払っているのに“いただきます”を言わせるのはおかしい」「義務教育なのになぜ給食費を支払うのか？払うくらいなら食べさせなくてもいい」などと難癖をつけ、給食費を滞納する保護者が実在するという。これには呆れた。

東京都教育委員会が都内すべての公立小中学校・高校にアンケート調査を実施したところ、2007年の1年間で理不尽な要求を繰り返す保護者らに対応しきれなかった学校が1割にのぼったとのこと。内容は、暴言・嫌がらせ・脅迫などが主で、学校だけでは解決し難いケースが多く報告されている。もはや、自己中心的で理不尽な要求を繰り返す「モラルに欠けた特異な人種」という括りでは済まされない。

数年前、医療現場に登場した「モンスターペイシエント（患者）」は、医師や看護師、事務員を精神的にも肉体的にも追い込み、医療現場から去らざるを得ない状況を作り出し、医療崩壊の一因として社会問題化した。教育現場も『モ

ンスターペアレント』によって崩壊の危機にさらされているといっても過言ではないだろう。

『モンスター』が出現した背景に「行き過ぎた市場経済万能主義によってもたらされた格差社会」「社会全体における権利意識の増大」「提供側の相次ぐ不祥事による信頼の欠落」「地域社会の崩壊」などが指摘される。また「少子化」も背景のひとつとされ、少なく産んで大事に育てるゆえの子供への異常な執着が『モンスター』に変化させるとも…。

問題は、保護者の『モンスター化』だけに止まらないということ。『モンスター』に育てられた子供が『モンスター化』しないとは限らないのでは？

成長過程において自己中心的な言動・行動を肯定することを覚えてしまっただけでは、学校教育課程で養われるべき集団生活適応力にも影響を及ぼし兼ねない。一方では思春期を迎える大切な時期に、父親が仕事を理由にか長時間労働を含めた過酷な労働からかは別として、子の養育は母親任せ、ないしは放任。家庭でも養われるべき社会適応性も身につかないまま子供は成人となる。昨今の信じ難い低年齢層犯罪や社会に責任転嫁した残虐な犯罪の多発がその裏づけとは思いたくないが、全面否定もできないのが苦しい。

“子は宝”。日本の持続的発展を担っていく子供たちのために、大人としてどのような社会を創り、そして引き継ぐのか？また、子の育成に責任をもつ親として生活のバランスをどう組みかえていくのか？自らが問い返し、考え、改め、行動するタイミングを逃してはならない。